歩兵の綴る日記

ハンブルグステーキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
歩兵の綴る日記

【Ｎコード】
Ｎ０５６２Ｆ

【作者名】
ハンブルグステーキ

【あらすじ】
大国の変人魔道兵がいろんな所で立ち回る半シリアス半コメディの冒険活劇？

プロローグ

初めまして。これを読んでいる人達、若しくは情報の解析担当の人。

私の名前はジョナサン。貴族ではないので爵位と苗字はない。

所属はヴェイロン帝国軍第２５歩兵師団第五大隊でいろんな隊をたらいまわしにされる魔道兵だ。

何故かって？　それはね、私が平民なのにピアノが弾けて尚且つ魔道士でしかもこのような喋り方だからさ。他にも戦場でパスタを死ぬ気でゆでたりした事とかのせいもあるかもしれない。

商家の三男坊なのだからしかたないだろう。軍に入ったのも私だけ父から貰う物が殆どないという理由なのだから。まあ、母からは十分すぎるほどに愛してもらったがね。

ああ、任務は負傷兵や傷病兵の治癒と戦場の地図作成等が主になっている。

さあこれくらいで自己紹介はいいだろう。是非ともこの手記を楽しんでくれ。

第一話　軍本部にて

今日は帝王暦春の月の１０日。今日で私の有給休暇は終わりまた、あの忌々しい貴族どもと顔を合わせなくてはならない。

しかし、何故だ・・・？何故魔法使いと呼ばれる人種には貴族が多いのだ・・・？

しかもどいつもこいつも自尊心の塊のような奴ばかりだ。仕事が出来ないくせにやたらとでしゃばりたがる。ただ一人を除いては・・・

「やあ、おはよう。」

私は軍本部の廊下であったそのただ一人の尊敬するべき貴族の女性に挨拶をした。

「おはよう。ジョナサン特務魔道三佐殿♪」

（おやおや今朝の彼女はご機嫌がいいようで・・・）

「もう聞いただろうけど私に中隊長就任の辞令が来たんだが・・・如何思う？」

すると彼女は微笑みながらこう言った。

「それ、私の父の手回しですよ～？仕事の出来ない馬鹿よりもあなたのほうが隊長に適任ですから♪。」

「何ッッつ！？」

思わず吹いてしまった。

「あれ？気づきませんでしたか？私はてっきり気づいているとばかり・・・」

そしてそんなこんなで我が中隊に割り振られた部屋についた。
父親の爵位が高い奴が多い隊ほど大きな部屋が割り振られるらしい・・・

「おやおや、同伴出勤ですか隊長殿に副隊長殿？あまり僕の足を引っ張るなよ？ククククッ。」
（相変わらず癇に障る声だ・・・隊長になったことだし此処は少し締め上げておくか・・・）
「黒き闇の力に体を蝕まれ命をすり減らすがいい・・・」
私はそいつに新作の呪術系魔法を掛けてみた。
「ヒイッ！？止めてくれ！！苦しい死にたい痛いイタイイタイ・・・・・・」

「ふむ・・・発狂する前で止めれて便利だなぁ・・・うん。採用。」
私は実践で使える魔法の誕生を祝いながら隊の皆さんに紅茶を淹れてやる事にした。
しかし、何故か副隊長であるスノウが飲むまで誰一人として紅茶に口をつけなかった。
さすがに私でも無関係の人間の茶に毒をいれたりはしないが・・・
ちょっと感想を新米の坊ちゃんに聞いてみた。

「と、とても美味しいです・・・お願いですから勘弁してください・・・。」

言っている事がむちゃくちゃだ。一体何を勘弁しろというのか。
するとそこでスノウが発言した。

「とりあえずジョナサン隊長殿は就任の挨拶をすべきではないでしょうか？」

確かに、流れですっかりわすれてた。ああ・・・関係ないけどパスタ食べたい・・・。

「ああ～これから諸君の隊長を勤めるジョナサンだ友人はジョンと呼ぶがな。だが貴様等には私をジョンと呼ぶ資格はない。私を呼ぶ時は「隊長殿」しか認めん。作戦時のコードはアンブレラだ。
そして、私の部下になったからにはお前等は実戦で私に認められるまではこの世界で最も下等な生命体だ。私に意見する時はしっかり考えてから意見しろ。無意味な文句は聞きたくない。以上。」

この挨拶を終えて周りを見るとスノウ以外の全員が顔面を蒼白にし・・・怯えていた。

第二話　南方諸島領紛争

私の中隊長就任から３週間ほど過ぎたある日の事。
軍本部は魔法通信と報告書の嵐が巻き起こっていた・・・
その理由は５年前皇帝が征服した南方諸島領で・・・正確にはロンダルキァ諸島同盟国家で帝国に対する叛乱が起きたという知らせが首都に届いたからだった。

「君と君の中隊に現地に侵入して艦隊がとまれるように港を確保してもらいたい。」

新米もいる部隊には荷が重過ぎるがとりあえずこの将軍はまだ考えが柔軟なので聞いてみる。

「何処かの隊がアシストをしてくれますか？我々だけではどうにもなりません。敵の警戒網も結構厳しいもでして。」

「勿論だ。情報局特殊斥候隊第七課に援護に回らせる。」

「それなら全くとは行かないまでも問題はありません。その任務ありがたく拝領いたします。」

「うむ。国家の威信が掛かってる。頑張ってくれたまえ。」

「了解しました。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

行きの船の中で・・・

「ええと・・・船酔いが４人ほど出てます隊長殿。」

「お前は大丈夫なのか？スノウ？」

「ええ。何度ものってますから。」

８人の内４人が戦線離脱をしているこの状況で敵の監視網に引っかかったら最悪だ。

そしてこういう時の私の予感は必ず当ってしまう。勘弁してくれ。

「そこの不審船に通告する。直ちに停船しろ！！停止せずに航行を続けるようならば砲撃する！！。」

ああ、神よ。私もここまでか。私は基本的に狙撃とナイフでの戦闘しか出来ない。癒者だしね。たとえ今この不安定な船上で撃っても恐らく確実に殺れるという保証はないだろう。

「スノウ。お前泳げるか？」

「はい。２、３人ならつれて泳げます。」

やはり彼女は才女だ。惚れるね。

「ではそこの船酔いしてる奴じゃない奴連れて飛び込め。」

「・・・じゃあ隊長殿は・・・ジョナサンはどうするの・・・？」

「情報の漏洩は私の責任だ。多分。だから残った奴等を守り敵と交

渉する人間が必要だ。」

「分かりました。それでは貴方が無事で任務に戻れるように祈っています。」

「是非そうしてくれ。それから・・・もう行った方がいい。」

「はい。では。」

そう言うと彼女はトプンと水に飛び込み、隊の連中を3人つれてもぐっていった。

「しかしどうしたものか？困ったな・・・。」

「今すぐ船員を全員甲板に集めろ！！これより臨検を行う！！。」

随分と小物臭漂う男がそうのたまった。

「へい。わかりやした。」

この船は漁船に化けているのでそれっぽく言ったのだがすぐさまそれが無駄だったと悟る事になる。

「この僕を誰だと思っている！！平民如きと一緒にするなっ！！」

などと寝ぼけて敵に言った奴がいたのだ。

「貴様帝国のスパイだな。フフフ、今命乞いをするなら助けてやらんでもないぞ？」

ニヤニヤしながらそんなことを言う。間違いない。この男、か　ま
せ　犬　だ。
そうだ。こういうこと言う奴は大概後で死ぬ奴だ。
「誰がそんなこと！！「お願いします命だけは勘弁してください。」
「なっ！！」
坊ちゃんが驚いている。
「貴様は分かっているようだな。という事は平民出身の特殊部隊員ということとか・・・あちらのリストにはそんなこと・・・」
どうやら此方にスパイがいたようだ。やれやれ。でも此処で終わってやるほど私は優しくないのだ。
「我、炎の魔神イフリートの契約者なり。契約に基づきその地獄の猛火を使役せん。出でよ炎の霧。」
短縮詠唱した炎の霧に契約の力をプラスしてみた。案の定敵の監視艇は轟沈。
「皆飛び込むんだ！！」
今ので少し落ち着いたのかは知らんが率先して飛び込み叫んだ男がいた。あいつ名前は確かキリル・グラードとかいったな。父親は国家安全保障局の局長で爵位は公爵らしい。
「おいグラード。お前を臨時の副隊長にする。ちょいと手伝え。」

すると案外あっさりと

「いいぜ。隊員の誘導は俺に任せてくれ。」

などといってくれた。意外と使える駒かもな・・・

そして再度炎の霧を使用する。

「ウボァー！！」

うちの船に乗り移っていた敵の監視員も全員焼き殺しておいた。

ほらね？小物臭がするって言ったろ？まあ私が殺ったんだが。

え？交渉？今のが私の交渉さ。本来の意味とは大分違うがね。

とりあえず港に着くことは出来そうな予感がした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0562f/

歩兵の綴る日記

2011年1月14日04時09分発行